―継続するあそびの計画と実践―

製作から、ごっこ遊びまで

山本益世

「継続するあそびの計画と実践」というタイトルでありますが、経験の浅い私には、はっきりした結論を出すには、あまりにも未熟な故、過去の一保育の計画とその実践経過を振り返ってみたいと思います。

一、子どもの姿

三年保育三才児（十二月生～三月生）十五名（男児六名、女児九名）のクラス編成である。一、二学期は、ただ紙をちぎったり、箱を並べたり、或いは、大きな箱の中に入って遊んだりと、その程度からあまり発展しなかったが、三学期に入り、心身の発達と共に、その生活も充実し特に「つくる事」に興味を持ち始めた。箱、紙、布、針金など引っぱり出してきては、のりでくっつけたり、セロテープで貼ったり、紐を巻きつけたり盛んにやり出した。またそれまでは殆んど無意図的であったのが、この頃から少しずつ意図的に物をつくるという方向に、向かいつつあった。（しかしまだまだ偶然にできあがることの方が多い。）例えば、家からキャラメルの箱を持ってきたと思うと、「先生、僕自動車作るんやで、牛乳のふたいっぱいちょうだい。」どうやら牛乳のふたは、車輪にするらしい。「ごま（車輪）いっぱいつけたら、よう走るんや。」とただ箱に牛乳のふたを、のりでくっつけただけであるが、誰からも教えられず、自分で考え、一つの自動車を創造（大げさであるが、）したのである。一人二人の例外はあるが、クラス全体が、何かをつくろう、つくってみたいという雰囲気にあった。

二、テーマ設定の理由

前記のように子どもの状態が、しだいに意欲的になってきているので、この期の保育として、製作に重点をおき、楽しい遊びの中から創造性を養い、自主の精神を身につけさせたいと考えた。

三、目　標

○いろいろな素材のあることを知る。(どんな物でも遊べるということを、製作を通して知る。)

○自分で材料を選ぶ。

○まずくとも、三才児なりに工夫して作る。(他人の良い考えからヒントを得ることもある。)

○技術は、粗雑であってもそれでよい。教師は良いできばえを望んで子どもの製作に手を加えるということは、絶対にしない。

○可能ならば、製作物で遊んでみる。

以上目標を羅列したが、ともかく子どもたちが楽しく遊べればそれでよいと考えた。このことは即ち右記の目標を達成することになるのである。

四、予　定

a、導入。材料を集める。集った材料を見たり触れたりしている中にその性質を知るようにしむけ、またそれらで遊んでいる中に製作意欲を起こさせるようにする。

b、展開。「何をつくりましょう」というのではなく「何ができるかな?」ということで始め、ともかく好きな物を勝手につくらせる。

c、整理。つくった物を見せ合う。また今度はどんな物をつくりたいか、どんな材料を集めたらよいか話し合う。

五、実践の経過

a、材料集め

子どもたちに、今まで製作の時に遊んだことのある素材を思い起こさせ、そのほかにどんな物で遊んでみたいかを考えさせた。

今まで製作の時に使ったことのある素材(小さい箱・包装紙・色紙・かまぼこ板・箸・ボール紙・牛乳のふた・セロファン)

「先生、僕ら大きな箱ほしいな。」

「牛乳のふたもまだまだいるよ。」

「あのね先生、あたしのママ毛糸いっぱい持ってるよ。幼稚園に持ってこうか。」

「あら、いいわね。持ってきてちょうだい。」

「あたしも。」「あたしももってくる。」

このようなわけで、家庭とも連絡をとり、従来の素材の他に、空かん・空瓶・毛糸・布・木綿・綿・袋・ダンボールの箱・針金・紐・ビニール・ハトロン紙などできるだけ多く集めた。

b、導　入

まず最初に、どんな物があるか、素材の入っている大きな箱を子どもたちの前にひっくり返してみた。「うわ—。いっぱいやなあ。」「あっこれ僕持ってきた箱や。」「あっこれあたしのや。」「僕の瓶やぞ—」と最初は自分の持ってきた物をしきりにさがしては、それ

を離さなかった。(やはり子どもでも、自分の物に愛着を感じるらしい。)また友だちに、得意そうに見せびらかしていた。そのうちに、「あれっこれきれいな箱やな。」「それ僕の持ってきた箱や。」「ちょっと僕に貸してよ。」「うん。」こんな具合に、持ってきた物の交換をはじめ、しまいには、自分の物も他人の物も区別なく、引っぱり出し、並べたり、積み上げたり、あるいは押しつぶしたり、引っぱったりして素材に親しみその特質を知った。

第一日目は、このようにして、素材に親しむことに終始した。

教師は、子どもたちの帰った後、素材を選びやすいように、分類しておいた。

c、展　開

翌日、子どもたちは、素材を分類して置いてあるのに気付く。そこで、「みんなが持ってきたもの、たくさんあるけど、これを使って何かつくってみない？」と問いかけた。「つくる！」「つくりたい！」昨日より素材に興味をもっている子どもたちは、そういいながら、もう中腰になっている。自分の道具箱を取りに行こうとする子もいる。

のりの使い方(紙の上でのりをつける事。)はさみの使い方は、すでに何回かの製作により経験しているが、もう一度子どもたちに確認させる。他に、新しい経験としてセロテープの使い方を説明する。また材料がいらなくなったら元に戻すこともつけ加える。(その間、子どもたちは、早くつくりたくて、うずうずしている様子に、すぐ活動に入る。)

大きな箱を見つけた子。小さな箱を両手に、一杯かかえ込んでいる子。好きな物が見つからないのか、あれこれ、ひっかき廻している子。毛糸玉をいくつかころがしている子もいる。お茶目のY男は、大きな袋を頭に冠り、ふざけている。製作にあまり興味を示さないH子は、やはり座ったまま皆のすることを、にこにこしながら見ている。「H子ちゃん、何でも好きな物をさがしてごらん。」「うん。」と答えたまま、素材の箱に目をやっただけ。「H子ちゃんも何かつくりたくなったら、つくったらいいわ。」とそのままにしておく。「先生、電車電車。」「あら、いいわね。」大きな箱に小さな箱をいっぱいくっつけてある。二階電車ということだ。車輪はついていない。それでも、チンチン、ガッタンガッタンと楽しそうである。M子は、タバコの箱を、いくつもくっつけて、その中が穴のようになっている。スズメの家だそうだ。教師のよけいな問に答えようともしないで、「ぎざぎざ紙ないかなあ。」と何にするのか、素材の箱の中に首をつっ込んでさがしていた。E子は、毛糸玉と箱を大事そうに机の上に置いてあったが、箱を斜めにしたとたんに、毛糸玉がすべり落ちた。「あっスベリ台すべり台」何度も毛糸玉をころがして遊んでいたが、細長い箱をくっつけて、スベリ台ができたと得意になっていた。

三日目。

昨日自分たちで片付けた素材の箱を引っぱり出し、早速遊び始め

た。H子も、昨日からの友だちの様子に刺激されてか、包装紙を小さく切り始めた。昨日電車を作ったS男は、今日も電車らしい。ボタンを一杯飾って、それに、牛乳のふたを車輪にしていた。製作にはいつも意欲をみせるM男は、針金（風船につける針金）を何本もセロテープでくっつけて、放射状に交叉している。「先生、くもできた。僕とこにこんな大きなくもいたよ。」なるほどうまく作ったものだ。セロテープが一杯重り合って、ちょうどくもの休のように見える。「くもやぞ―。」と皆をこわがらせていた。子どもたちは、全く自由に素材を選び、時には、作った物をこわし、また「くも」が「ヘリコプター」に変ったり、種々さまざまに遊んでいた。豊富な経験を持ち合せていない教師は、愚問をしたり、意欲をそぐような助言をするよりはと、「まあ、いいわね。」とか「いい物を見つけたわね。」としきりに励ますかたわら、子どもたちが素材を選びやすいように、置き場所を工夫したり、狭い室のこととて、活動しやすいように机を寄せたり、子どもたちの作っているのを笑顔でのそいたり。

四日目。

T男は、昨日作ったこわれかかった汽車を走らせながら、「キシャキシャポッポポッポ」と楽しそう。教師も箱を一つ取り出し、「キシャキシャポッポポッポ」と一しょに歌ってやる。製作していた他の子どもたちも歌い出した。「先生、大きな箱持ってきて。」とM男。「どうするの？」「大きな大きな箱。僕ら入れるのやぞ―。」「持ってきてあげるわ。でもどうするの？」「先生知らんの、汽車作るんや。」と一本やられました。

「僕も。」「あたしも。」と今までの製作を放り出して汽車を作るという。ダンボールの箱を五個持ってくると、たちまちその中に入って「汽車汽車」と大騒ぎである。ひとしきりこのダンボールの箱ならぬ汽車で遊んだ。運転手までできた。そこで教師は、共同製作まで発展させようと考え、誘導してみた。汽車に乗った経験を話させ、次に子どもたち自身に汽車にならせて、汽車ごっこをさせた。運転手や車掌になる子もでた。おまわりさんになって交通整理をする子までで、一日中汽車ごっこに熱中。明日はすばらしい汽車を作ろうと約束した。

五日目。

製作を始める前に、どんな汽車を作りたいかを考えさせた。子どもたちの意見は、殆んど今話題の〝夢の超特急〟だ。ピンク色できれいだとか、電気がいっぱいついているとか、すごく長いとか種々の意見がで、三人ずつに分かれて、作り始めた。早速布切や包装紙をヘタヘタ貼り始めた。ある子どもは、調和を考えて、小さく切ったり、大きく切ったりして貼っていたが、たいていの子どもは、大きいままで平気である。「先生、ボタン、ひっつかないよ。」とS男。ボタンを箱につけようとするが、つかずに困った様子。「セロテープ使ったら、どうかな。」「あっ、そうや。」と箱の内側にも外側にも、たくさん貼り始めた。「トンネルの中暗いやろ。それで電気一杯つけるんや。」ということだ。M子たち女の子の汽車は、牛乳のセロファ

ンを一杯くっつけて「お花の汽車みたいやろ。」とやはり女の子らしい。H子も、きれいな包装紙を小さく切っては、根気よく貼っていた。また牛乳のふたをいくつか重ねて、大きなセロファンで包み、それを車輪にしている子もいた。M男、T男、Y男らは、一つの汽車に、思い思いに布やボタン、箱を貼りつけ、それこそ新型の汽車が完成？　したが、たちまち「衝突！　脱線した！」とこわして、今度は自分たちが汽車になって、庭へ出ていってしまった。それにつられて、他の子どもたちも「汽車ごっこしよう。」とあわてて作りかけを片付けて出ていく。友だちのちょっとしたことをすぐまねようとするのは、この年令の特徴かも知れない。

六日目。

昨日の作りかけの汽車に入ってガッタンガッタンとやり始めた。聞いてみると、もうこれできれいになったのだという。少々作ることに飽きてきたふうである。それよりも早く自分たちの作った汽車に乗ってみたいのだろう。(M男たちは、昨日のこわれたのを直すのに必死である。)できあがった汽車を五個並べ、一番前には運転手になる子が乗り、後にはお客が乗った。ガッタンガッタンと走り？　出した。教師は音楽係をかってでる。「キシャキシャシュッポシュッポシュッポ……」子どもたちは箱を両手で揺すって、結構汽車に乗った気分でいる。箱の底を破るとすっぽりと体が入ってほんとに走れるのにと思ったが、子どもたちが気がつくまではとあえて手伝わなかった。(とうとう気がつかなかったが)今度は、めいめい汽車を引っぱり始めた。後を押す子。中に入る子。また汽車同志を衝突させて喜ぶ……など。ぺしゃんこになるまで遊んだ。

d、製作あそびを振り返って

まず第一に、一、二学期に比べて、子どもたちがすっかり成長しているのに驚く。技術ではなく、その態度、意欲においてである。「先生、できない。」とか「これ切って。結んで。」などと言っていたのが、まずいなりにも、自分でしようとする態度に変わってきた。また無気力な子どもも何日か続いた製作あそびのうちに、やろうと思えばやれるのだという糸口がつかめたようである。例えば、H子の例である。

またこの遊びを通して、物を大切にするということが十分身についたように思う。小さな紙片やこわれかけた箱までも、「これまだ使えるね。」と持ってくる。「この頃どんな小さな紙屑でもとっておいてくれ、というのですよ。」とお母様方の間からも聞かれた。

はじめは、ただ漠然と素材を集め、遊んでいるうちに製作に入っていったのであるが、そして作品は、殆んどこわしたが、粗雑な物であるが、子どもたちは、作る楽しみと作った物で遊ぶ楽しみを味わえたのではないかと思う。それに加えて、もっと教師が、適切な助言を与え、環境構成、導入方法を工夫すれば、子どもたちの製作意欲をより十分に満足させていたのではないかと反省すると共に、次の研究課題を発見させてくれた保育であった。

(和歌山信愛女子短期大学付属幼稚園)